政大日本研究【第五號】
2008 年 1 月，頁 29~64

補助動詞的語法化

與日語「て」型的時貌(aspect)用法

吉田妙子*

摘要

接在日語「て」型後面十個最具代表性的補助動詞原本的意義已然消失，成為表語法功能的形式動詞，專門表示前接動詞的時貌。其次，日語動詞的連用中止形則與其他動詞接續組成複合動詞，後接的動詞若詞彙本身不具時貌，該動詞的連用中止形亦不表時貌。為什麼只有接在「て」型後面的動詞能表示時貌？為什麼上述的補助動詞與「て」型接續後，便具有時貌用法？本文推論與「て」型本身帶有完成貌有關。因為「動詞「て」型＋補助動詞」(Vv)都有「做了 V」之後做 v 的意思。

本文將考察時貌用法較明顯的四個句型—「ている」、「てある」、「てくる」、「ていく」的語法化過程，來證明「て」型本身便帶有時貌用法。

關鍵詞：「て」型、補助動詞、語法化、衍生過程、時貌

* 政治大學日本語文學系・副教授

補助動詞の文法化とテ形のアスペクト性

吉田妙子*

要旨

テ形に後接する代表１０個の補助動詞は文法化し、形式動詞となって、前接動詞のアスペクトを表す。一方、動詞の連用中止形は別の動詞を後接して複合動詞を作るが、後接動詞が語彙的にアスペクトを含むものでない限り、アスペクトを形成しない。なぜテ形に後接する動詞は限られているのか。また、なぜこれらの補助動詞はテ形に接続すると、アスペクト性を帯びてくるのか。それは、テ形そのものに完了のアスペクトがあるからだと考えられる。「動詞のテ形＋補助動詞」(Vv)は、いずれも「V してから v する」という構造を持つ。

本稿では、特にアスペクト性の高いテイル、テアル、テクル、テイクの４つの補助動詞が文法化する過程を考察し、それがテ形自体の持つアスペクト性のゆえであることを証明する。

キーワード：テ形、補助動詞、文法化、生成過程、アスペクト

* 政治大学日本語文学科・副教授

Grammaticalization of Auxiliary Verbs and the Aspectual Property of *Te* Form

Yoshida, Taeko*

Abstract

Ten typifying auxiliary verbs, which follow the *Te* form of verbs, convey the aspect of their preceding verbs after the process of grammaticalization and becoming formal verbs. In addition, the combination of a verb's adverbial form with the verb itself constitutes a compound verb, but the verb cannot express aspect as long as it does not embrace aspect lexically. Then the question arise：Why is this derivation limited to auxiliary verbs following *Te* Form? And why do these auxiliary verbs acquire aspect when they follow the *Te* Form? The answers to these questions, according to this study, lie in the fact that the *Te* Form itself cannotes realis.For all the ten typifying auxiliary verbs, the structure " *Te* Form＋auxiliary verb "(V v) connotes the ideal "doing the action of v after doing the action of V".

This paper examines the process of gramaticalization of four auxiliary verbs with high-aspectual properties, namely *Te* -iru, *Te* -aru, *Te* -kuru, *Te* –iku, and demonstrates that the grammaticalization is due to the aspectual that *Te* form itself possesses.

keyword：*Te* form, auxiliary verbs, gramaticalization, process of derivation, aspect

* Associate Professor of Department of Japanese, National Cheng-Chi University

補助動詞の文法化とテ形のアスペクト性

吉田妙子

１．はじめに

第二中止形とも呼ばれるテ形は、イル、アル、ミル、オク、シマウ、ヤル[1]、クレル、モラウ、イク、クル等の動詞を後接して補助動詞を形成する[2]。これら 10 種に代表される補助動詞は、文法化の過程を経てもともとの動詞の意味が漂白され、アスペクトを表すようになった一種の「形式動詞」と言える[3]。

一方、第一中止形とも呼ばれる連用中止形にも、さまざまな動詞が後接して「複合動詞」を作る。吉田（2006）では、テ形と連用中止形を形態面で比較し、前者に後接して補助動詞を作る動詞（上記の 10 種）と、後者の作る複合動詞の後部動詞が完全な相補分布をなしていることを確認した。

上記 10 種の動詞は、なぜテ形にしか接続しないのであろうか[4]。吉田（2006）では、『V-(i)の形は、動詞としては、テンスやアスペクトが与えられていない不定形の「途中の形」で、他の語と複合しなければ定形になりにくい。これに対して、V-Te の形は動詞の完全

---

[1] テヤルとテアゲルは単に授受の相手の上下に違いがあるだけでなく、テヤルはテアゲルより用法が広い。例えば、「殴ってやる」などの挑戦の用法は、テアゲルでは代用できないゆえ、本稿では、テヤルを授与動詞の代表とした。また、授受動詞の場合は、敬語表現テサシアゲル、テクダサル、テイタダクも含む。

[2] 補助動詞にはこの他にテミセル、テスム、テスマス、テヨコス、テマワル、テノケルなどがある。また、テホシイなど、形容詞が後続するものもある。

[3] 松下（1989）は、テ形に後続する動詞を「形式動詞」と呼んでいる。（ｐ.409）

[4] 「流れて行く」=「流れ行く」、「寄せてくる」=「寄せ来る」など、多少の例外はあるが、このような例はイク、クルだけに見られるものであり、しかもル形の用法に限られている。また、これらは後に４．２．で述べるような空間的移動または時間的移動を表す用法であって、アスペクトを表す用法ではない。さらに、「流れ行く」「更け行く」のような「V-(i)+行く」の「行く」は必ず「ゆく」と読むことから、「V-(i)+行く／来る」の形は多分に古語の用法を残した慣用句的なものと考えられる。

な定形ではないが、アスペクト的な方向を持っているのではないかと思われる。』と結論付けた。しかし、「V-Te がアスペクト性を持っている」というのは、単に記述的に観察されるのみで、証明するには決め手に欠けていた。本稿ではそれを一般化したい。

テは古語の完了の助動詞ツの連用形でもあるが、古語辞典ではそれとは別項目で接続助詞とも記されている[5]。テがツの連用形であるとすれば、明らかにアスペクト性を備えているのだが、それとは別語源の接続助詞であるとすれば、アスペクト性は保証され得ない。補助動詞の文法化の過程の考察からテ形のアスペクト性を考察することも、本稿の目的の一つである[6]。なお、表記の便宜上、テ形を V-Te、連用中止形を V-(i)と標記することにする[7]。

２．補助動詞の文法化

２．１．補助動詞のアスペクト性

V-Te に後続する代表 10 種の動詞を、本来の意味により分類する。

Ａ．居る、有る：存在動詞

Ｂ．行く、来る：移動動詞

Ｃ．遣る、呉れる、貰う：授受動詞

Ｄ．見る[8]、置く、終う：動作動詞

これらは、「終う」が終了のアスペクトを含んでいるほかは、いずれも語彙的にはアスペクトと無縁の動詞である。Ｂ類は移動動詞であるが、空間的移動はもともとアスペクトを表すものではない。Ｃ類は方向性を持ってはいるが、必ずしも物の移動性は含まない。状

[5] V-Te の語源については議論のあるところであるが、時枝（1954）に従えば、山田孝雄などは接続助詞の V-Te を認めず、V-Te をすべて「つ」の連用形と考えている、ということである。

[6] 湯廷池教授も、湯（2007）の中で、V-Te のさまざまな用法は「『先行』の基本義から派生された拡張義」であるとされている。

[7] V-Te、V-(i)の標記については、吉田（2006）を参照のこと。

[8] テミルは「試行」を表すゆえ、「試る」と漢字表記されることが多いが、すぐ後に述べるように、「Ｖしてから、その結果を見る」というアスペクトがあると考えたので、「見る」と表記した。

態動詞であるＡ類、およびＤ類の「見る」「置く」は、語彙的アスペクトの影もない。しかし、これらに V-Te が前接すると、文法化してアスペクト性を帯びてくるのである。

一方、V-(i)が複合動詞を作る場合、前接動詞の語彙的性格によって後接動詞が違ってくるものの､ほぼすべての動詞に後接するのは、寺村（1987）に従えば、ハジメル、ダス、カケル、ツヅケル、ツヅク、オワル、オエル、ヤム、などのアスペクト性の動詞である。しかし、これらのアスペクト性はひとえにこれらの語自身がすでにアスペクトを含んでいるためであり、V-(i)と結合して初めてアスペクト性を得るものではない。これらの語は文法化することなく、複合語になっても、その語自身の意味を保っている。寺村（1987）が V-Te に後続する補助動詞を「二次的アスペクト」、V-(i)に後接する上記の動詞を「三次的アスペクト」と言ったのも、語彙性の低いものから順に一次、二次、三次と考えたためであろう。

では、V-Te に後続する代表 10 種の動詞は、いかにして文法化されるのであろうか。V-(i)が作る複合動詞をV_1V_2とし、V-Te に補助動詞がついた形をＶｖとすると、V_1V_2ではV_1とV_2が並存しているか､一方がもう一方の意味を補足しているのに対し､Ｖｖの方は、もし、V-Te が完了のアスペクトを持っていると仮定するなら、いずれも「Ｖしてからｖする」という順序が存在することになる。以下、その仮定に従って補助動詞を分析する。

V-Te＋イル：意志的動作Ｖを行い､そのまま存続する（動作進行）。または、非意志的動作・作用Ｖがあり、その結果がそのまま存続する（結果状態）。

V-Te＋アル：意志的動作Ｖを行い､その結果がそのまま存続する。

V-Te＋テイク：誰か（何か）による動作・作用Ｖがあり、そのままある場所・時点まで続行する。

V-Te＋テクル：誰か（何か）による動作・作用Ｖがあり、そのま

ま話者のいる場所・時点まで続行する。

V-Te＋ミル：意志的動作Ｖを行ってから、その結果を見る[9]。

V-Te＋テオク：意志的動作Ｖを行ってから、次の段階を待つ、または、そのまま放置する。

V-Te＋テヤル：誰かが意志的動作Ｖを行い、その効果（恩恵または被害）を他者に与える。

V-Te＋テクレル：誰かが意志的動作Ｖを行い、その効果（恩恵または被害）を話者に与える。

V-Te＋テモラウ：誰か（何か）による動作・作用Ｖがあり、その効果（恩恵）を他者が受ける。または、誰かによる意志的動作Ｖを、他者が求め、恩恵を受ける。

V-Te＋テシマウ：動作・作用Ｖが完了し、復元不可能である。

以上の仮定は正しいであろうか。本稿では次節で述べるような理由から、この 10 種の補助動詞のうち、４種を選んで検討したい。

２．２．文法化の過程

Hopper and Traugott（2003）は、文法化の現象を詳細に検討しつつ、文法化の原理として「脱範疇化（Decategorialization)」、「一般化(Generalization)」、「重層化(Layering)」、「持続(Persistence)」、「分岐化（Divergence)」、「専門化（Specialization)」、「更新（Renewal)」、「使用頻度（Frequency)」[10]などを挙げているが、このうち注目したいのが「脱範疇化」「一般化」「重層化」「持続」である。文法化とは、内容語がその形態的・統語的特徴を失い、機能語の働きを獲得することである（「脱範疇化」)。もともとある語が文法

[9] 長野（1998）は、「Ｖシテミロ」の構文、例えば「そんなこと言ってみろ、マスコミに叩かれるぞ。」という文は、後続文の命題部分「マスコミに叩かれる」が本来ミルの補文になっており、「そんなこと言って、マスコミに叩かれるという結果を見ろ」という構造である、と述べている。この長野の観察は筆者の考えを裏付けるものであり、また、テミルだけはアスペクトを表さないのではないか、という一般の疑問を覆す根拠にもなり得ると思われる。

[10] 用語の訳語は、日野（2003）に従った。

化する際には、意味の分布が広がり、それだけ指示対象が増え（「意味の一般化」）、指示対象が増えるにつれて語の選択制限が失われて、より広い文脈で使われるようになる（「文法の一般化」）。しかし、新しい形式と構造が現れた時、もともとの形式と構造がまったくなくなるのではなく、新と旧が共存し（「重層化」）、機能語となってももともとの内容語の意味が保たれ、そのことによって文法的分布に制約を与える（「持続」）。

補助動詞における「重層化」と「持続」とは、前節で述べた「Vしてからｖする」という形に他ならないであろう。そのことが確かめられるなら、それは V-Te が完了のアスペクトを持つことの有力な証左となるであろう。また、「脱範疇化」「一般化」は、補助動詞においていかなる現れ方をしているのか。それらを次章で検討する。

２．３．補助動詞の左右行列

本節では、10 個の補助動詞相互のアスペクト性の強さを比較する。

寺村（1986）は、文の構成として「題目（主語）‐補語‐述語‐ヴォイス‐アスペクト‐テンス‐ムード」という配列を示している（p.60）。表１は、補助動詞相互の結合可能性を調べたものであるが、位置が後ろに来る補助動詞ほど、アスペクト性が強いことになる。

［表１］

後続 / 先行	テイル	テアル	テミル	テオク	テシマウ	テヤル	テモラウ	テクレル	テイク	テクル
テイル		×	×	×	×	×	×	×	×	×
テアル	×		×	×	×	×	×	×	×	×
テミル	○	○		○	○	○	○	○	○	○
テオク	×	○	○		○	○	○	○	○	○
テシマウ	○	○	○	○		○	○	○	○	○

テヤル	○	○	○	○	×		○	○	○	○
テモラウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○
テクレル	○	○	×	○	○	×	×		○	○
テイク	×	×	×	×	○	×	×	○		×
テクル	○	×	×	×	○	×	×	○	×	

＊ 縦列が先行補助動詞、横列が後続補助動詞となる。例えば、縦列の「ている」と横列の「てもらう」の交差箇所は「ていてもらう」になるが、これは「先生が来るまで静かに勉強していてもらう」などの例が可能なので、○になる。

＊ 斜め線は、理論上不可能な組み合わせ。同じ補助動詞が２つ続くことはあり得ない。

＊ テイルは動作進行を含まず、結果状態の用法である。

＊ テイク、テクルは、「ご飯を食べていく」「ご飯を食べてくる」などの「Ｖシタ後デ移動スル」という用法を含まない。

この表により、より後方に位置する可能性の強いものは、以下のような左右行列になる。

テクレル＞テイル、テアル、テイク、テクル、テシマウ＞テオク＞テミル、テヤル、テモラウ

このうち､テクレル､テシマウが比較的左方に位置しているのは、テクレルは「話者にとっての恩恵」、テシマウは「遺憾の気持ち」を示すという、モダリティに近い用法があるため、文末につきやすいからだと思われる。同じ授受動詞であるテヤル、テモラウもモダリティ性が強い。それらの動詞を排除すると、

テイル、テアル、テイク、テクル＞テオク[11]＞テミル

という順序になり、テイル、テアル、テイク、テクルは同等にアス

[11] テオクがテイル、テアル、テイク、テクルの次に位置するのは、テオクの完了形テオイタの構文がテアル構文と同義になることがあるからだと考えられる。

ペクト性が高いことがわかる[12]。

本稿では紙幅が限られていることもあり、最もアスペクト性の高いテイル、テアル、テイク、テクルを補助動詞の代表として、Hopper and Traugatt（2003）の言う文法化の原理の現れ方と、V-Te のアスペクト性との関わりを考察する。

３．テアルとテイルの文法化

３．１．テアルの文法化

３．１．１．非対格動詞にテアルが接続する場合

状態描述文においてテアルは対格動詞および非能格動詞に接続し、テイルは非対格動詞に接続する、というのが一般の了解であるが、実例を見てみるとそう一筋縄ではいかないことがわかる。ここでは、吉田（2007b）を本稿に必要な部分だけ要約し、検討を加える。

自動詞にはテイルが後接し、他動詞にはテアルが後接して結果状態を表すことになっている。無対他動詞にテイルを後接したいなら、自動詞に相当する受身形にテイルを後接して、ラレテイル構文にすればよい。それ故、受身形や非対格動詞にテアルをつけるのは非文のはずである。しかし、現実には「私の本に他人の名前が書かれてある」など、受身形にテアルを後接したラレテアル文も現れる。

益岡（1987）はテアルを描述性の高いＡ類（現存文[13]）と意図性の高いＢ類（意図達成文[14]）に分け、さらにＡ１類、Ａ２類、Ｂ１類、Ｂ２類と下位分類し、Ａ１は「置く」「飾る」などの配置動詞[15]、Ａ２は状態変化動詞[16]、Ｂ１は状態存続動詞[17]、としている[18]。

---

12 寺村（1987）でも、テイル、テアル、テイク、テクルのみが二次アスペクトとされている。
13 例えば「机の上に本が置いてある。」などの現象文。
14 例えば「友達が来るので、部屋が掃除してあります。」など、準備の意図を持って行われた行為が、その意図を達成し、効果が持続している文。
15 「捨てる」などの放置動詞も含まれると思われる。
16 「書く」などの書記動詞、「作る」などの作成動詞も含まれると思われる。
17 「預ける」「貸す」「残す」「隠す」などが挙げられている。

森田（1994）では、ラレテアル文が 17 例収集されているが、そのうち益岡の言うＡ1 類の配置動詞が前接する例は９例、Ａ2 類の状態変化動詞に前接する例は５例、Ｂ1 類の状態存続動詞に前接する例は３例、Ｂ2 類に前接する例は皆無であった。そして、これらはみな現存文であった。すなわち、Ａ1→Ａ2→Ｂ1→Ｂ2 の順でラレテアル文の出現率が高いのである。

このことは、ラレテアルという文法常識を逸脱した、いわば「型破り構文」も、現存文なら許されるということである。この森田（1994）の調査結果は、Ａ1→Ａ2→Ｂ1→Ｂ2 の順で現存文の現れる率が高いという益岡（1987）の観察と一致するものである。

また、森田（1994）では「並んである」「ころがってある」という超型破り構文の実例を紹介しているが、これも現存文であった。テアル構文は文字通りには、「Ｖして、有る」という構造であるが、ここで「対象がＶされた後で、そのままの形を保って存在する」という意味機能を基本とすることが確認された。

これは、前章で述べた Hopper and Traugott（2003）の「重層化」―新しい形式･構造と古い形式･構造が共存すること―に他ならず、また「持続」―もともとの内容語の意味が保たれることによって文法的分布に制約を与えること―に他ならないであろう。そして、これが現存文に限って現れるということは、抽象度が低く「一般化」の進んでいない現存文ほど「脱範疇化」が遅れ、存在動詞「有る」の「古い形式･構造」の母斑が強く残っているということであろう。

３．１．２.「有る」からテアルへの文法化

益岡（1987）が分類したテアル構文は、Ａ類が現存文、Ｂ類が目的達成文とされているが、Ａ1 類、Ａ2 類、Ｂ1 類、Ｂ2 類の順で文法化が進んでいると思われる。

[18] 益岡（1987）は、Ｂ2 動詞の特徴づけはしていないが、「言う」「指示する」などの例が挙げられていることから、「伝達動詞」の類であろうと判断される。

元の動詞：場所名詞 ニ　対象：モノ名詞 ガ　有る

例「ここに花瓶がある。」

A1類：場所名詞 ニ　対象：モノ名詞 ガ　配置動詞テアル

例「ここに花瓶が置いてある。」

A2類：対象：モノ名詞 ガ　状態変化動詞テアル

例「おや、花瓶がきれいに磨いてある」

B1類：対象：モノ名詞・コト名詞 ガ／ヲ　状態存続動詞テアル

例「高価な花瓶［が／を］実家に預けてある。」

B2類：着点 ニ　対象：コト名詞 ガ／ヲ　伝達動詞テアル

例「家族には、毎朝花瓶を磨くこと［が／を］、言ってある。」

ここから、A類とB類には明らかな構文上の差が見て取れる。

第一に、ニ格名詞の種類である。A類は、「対象の存在その他の状態が、視覚でとらえられる形で存続していること」（益岡 1987、p.224）である以上、それはダイクティックな表現とならざるを得ず、従ってテアル現存文は、場所項を潜在的に伴っている。このうちA1類は場所ニ格が言語化されているが、A2類は必ずしも言語化されていない。従って、A類のテアル現存文の項構造は［Th[19]、（Lo[20]）］ということになる[21]。

これに対し、より抽象的な存在表現であるB類では直示性は失われ、従って場所ニ格も姿を消す。代わりに登場するのが、着点ニ格[22]である。特にB2類の伝達動詞は、相手項を伴わずにはいない。しかしB1類は、着点項は必ずしも言語化する必要があるとは限らな

[19] Th：Theme、対象。

[20] Lo：Location、場所。（Lo）は、場所項が現れる場合も現れない場合もある、ということである。

[21] 例えば、「置く」という動詞の場合、「床にカバンを置く」という文で、「床」の意味役割は場所というより着点（Goal）である。これを「カバンが床に置いてある」とした場合、「床」の意味役割は相変わらず着点である。「床にカバンがある」という存在文の「床」は場所（Location）であるから、存在文とテアル現存文では「床」の意味役割が違うことになる。

[22] 着点とは、動作の方向を持つ動詞に伴う項である。移動動詞の目的地、授受動詞の相手、配置動詞の配置場所など、動作主または対象が動作の結果行き着く地点である。

い。そこで、Ｂ類のテアル構文の項構造は、［Th、(Go[23])］となる。

Ａ類とＢ類の差異の第二は、対象項のガとヲである。Ａ類では特殊な場合を除いてガしか取れないが、Ｂ類はガとヲの両刀使いである。このガは現象文の主語に用いられる直示のガである。Ｂ類では、もともとの他動詞の対象を表すヲが復活する。特にＢ２類では、よほどの文脈的条件がない限り、ヲ格を取る例が断然多くなっている。

第三は、対象となる名詞の種類である。対象を直示的に描述するＡ類では、モノ名詞しか可能でない。しかし、Ｂ１類ではモノ名詞、コト名詞の両刀使いで、Ｂ２類に至ってはコト名詞しか可能でない。

以上の３点からわかるように、Ａ1 からＢ２ にかけて、明らかに抽象化の過程が見られる。同時に、ダイクティックな「目の前性」に縛られたＡ類テアル文は、Ｂ類テアル文よりも表現形式が制限されている。このことからも、Hopper and Traugott（2003）の「一般化」の原理の段階的な現れ方が見て取れよう。

３．１．３.「有る」からテアルへの生成過程

本来は非意志的な存在動詞「有る」が、なぜ意志的動作の結果を表すようになったのであろうか。つまり、テアル構文になると、なぜ非意志性が漂白されて、意志性の動詞が使えるようになるのだろうか。それは、テアル文の構造から理解できる。

(１)　本に名前が書いてある。

という構文は、次のように生成される。

(２)　誰かが本に名前を書いた。　［Ag[24]、Th、Lo］

↓　［誰かが［本に］［名前を ka(k)］ｉた］[25]

(３)　本に誰かの仕業で名前が書いてある。

---

[23] Go：Goal、着点。

[24] Ag：Agent、動作主。

[25] 子音動詞「書く」は、「kak」を語幹とするが、タ形を作る際の音便変化により、後部のｋがｉに変化したことを表す。

↓　　［t_1[26][誰かの仕業で］［本に][名前が][［$t_2$ka(k)]i て]ある]

(１)　本に名前が書いてある。　［Th、Lo］

［t_1~~[誰かの仕業で]~~［本に][名前が][［$t_2$ka(k)]i て]ある]

（２）の対象格「名前を」は（３）で主格のガ格に昇格し、それによって(２)の主格「誰かが」は（３）で付加詞「誰かの仕業で」に降格する。最後に言語化の必要のない付加詞がカットされ、（１）の文ができあがる。かくして、もともとの（２）の項構造には存在した動作主（Ag）が最後の（１）では姿を消すことになる。

これは、「［私の本に］［他人の名前が］［書いて］ある」という枠組になり、［私の本に］［他人の名前が］［書いて］がいずれも「ある」を修飾する構造である。これはまぎれもない現存文であり、「ある」の意味が保存されていることは、Hopper and Traugott（2003）の「重層化」「維持」を具現していると言える。また、もともとの「有る」という意味の非意志性が漂白されて、背後に動作主が隠されたテアル構文が生成されるということは、まぎれもなく「文法化が進むにつれて意味の分布が広がり、意味の分布が広がるにつれて語の選択制限が失われて、より広い文脈で使われるようになる」という「一般化」の原理と合致するものであろう。

３．２．テイルの文法化

３．２．１．テイルの用法の連続性

テイル構文は、テアル構文と正反対に、もともとの意志動詞「居る」[27]の意志性が漂白されて非意志性に変化したものである。その基本用法は、

(３)　あそこに犬が寝ている。

---

[26] t：trace、痕跡。項が昇降格によって移動した後の痕跡。

[27] 「私はあしたはずっと家にいます。」など所在を示す場合は意志性だが、「この家には太郎という人はいません。」など、所属を示す場合は、非意志性であろう。中国語では前者の「いる」を「在」、後者の「いる」を「有」と区別する。

のように、活動動詞[28]について動作進行を表す用法と、

（4）　蝋燭の火が消えている。

のように、到達動詞について結果状態（「結果存続」「結果継続」とも言う）を表す用法の２つが基本である。これらは、「[犬が]［寝た状態で］存在する」「［蝋燭の火が］［消えた状態で］存在する」と読み取れ、いずれも現存文、つまり直示文である。

しかし、一見現存文に見えない用法もある。

（5）　カントは 70 才で「純粋理性批判」を書いている。

これは、「経験」「経歴」「記録」「歴史的現在」などと呼ばれる用法であるが、これも広義の結果継続である。「火が消えている」など短期の結果継続から、カントの行為の現代に至るまでの哲学界への影響という歴史的視野での結果継続への、メタファーだと考えられる。これは、グラフや統計資料を見ながら過去から現在への経過を報告する文にもよく現れる。

（6）　見合い結婚は 60 年代までは半数近くを占めているが、70 年代から減ってきて、80 年代以降は 20 パーセント代に落ち込んでいる。

また、次のような例もある。

（7）　（テーブルのクッキーの皿を見て）あっ、またあの子、つまみ食いしてる！

これは、子供がクッキーを食べている現場を捉えて発話しているわけでなく、クッキーが減っているのを見るなり、テーブルにこぼれているクッキーの屑を見るなり、「あの子」の過去の行為の痕跡を目の前にして判断しているのである。これも一種の結果存続とも考えられるが、他方で痕跡の目の前性[29]から過去の動作を思い浮かべるという、いわば「擬似現存文」とも考えられる。

---

[28] Vendler の動詞の 4 分類。状態動詞、活動動詞、到達動詞、達成動詞の 4 種。
[29] 「目の前性」の概念は、台湾日本語文学会 1999 年 3 月例会「1999 年度春季特別講演」で、お茶の水女子大学教授（当時）の鈴木泰氏にご教唆いただいた。

（５）（６）（７）の例はいずれも到達動詞だけでなく、活動動詞も用いられるのが特徴であることから、動作進行の用法と結果継続の用法は連続層をなしていると言えよう。（７）の例は、ちょうどこの中間に位置しているのではないかと思われる。寺村（1987）は、この２つの用法を吟味し、テイルの中心的な意味を「既存の結果が現在存在していること」と言っている（p.127）が、結果を持たない活動動詞の場合は、既存の動作がそのまま発話時まで続いている、ということになるだろう。

３．２．２.「居る」からテイルへの文法化

前節で述べたことを整理する。

元の動詞：場所名詞 ニ　動作主：有情名詞 ガ　居る

例「あそこに犬がいる。」

段階１：場所名詞 デ　動作主：有情名詞ガ　活動動詞テイル

対象：非情名詞[30]ガ　活動動詞テイル

例「あそこで犬が寝ている。」

「花が揺れている。」

段階２－１：動作主：有情名詞ガ　活動動詞テイル

例「（汚れたベッドを見て）あっ、また犬がベッドで寝てる！」

段階２－２：対象：非情名詞ガ　到達動詞テイル

例「花が萎れている」

段階４：時間副詞　動作主：有情名詞ガ　活動／到達動詞テイル

時間副詞　対象：非情名詞ガ　活動／到達動詞テイル

例「この犬は、前に一回人を噛んでいる。」

「この花は、去年の品評会で賞を取っている。」

段階１は進行動作の用法、段階２－１は痕跡目の前性の用法、段階２－２は結果存続の用法、段階３はいわゆる「歴史的現在」の用

30 モノ名詞・コト名詞を含む。

法である。ここから、以下の３点が読み取れる。

第一は､付加詞である｡元の動詞および段階１のような現存文は、ニ格場所項を必要とする。しかし、段階１は動作のあり方を修飾するわけだから、ニ格でなくデ格場所項になる[31]。しかし、非情物主語の場合は、自ら存在位置を選ぶことができず、場所はすでに決まっている故、場所項は言語化不要である。段階２－１も現存文であるが、事態の発生場所は発話地点に限られているため、これも場所項は言語化不要である。また、段階２－２は「冷蔵庫にビールが入っている」など、テアル文とペアになるテイル文はニ格場所項を必要とするが､「さびる」「萎れる」「腐る」「枯れる」「よみがえる」などの無対自動詞は場所項を必要としない[32]。これは、テアル文とテイル文のペア用法が現存文に限られているからである。さらに段階３になると、場所項は姿を消し、代わって時間項が必要となる。空間から時間へのメタファーというのは、抽象化の定石であろう。

第二は、主格名詞の種類である。元の存在動詞では有情物しか主語になり得ないが、テイル構文では有情物も非情物も主語になる。

第三は、動詞の種類である。段階１では活動動詞しか用いられないが、段階２、段階３では活動動詞と到達動詞が共に用いられている。しかし､段階２では、２－１の痕跡目の前性の用法が活動動詞、２－２の結果存続の用法が到達動詞と、それぞれ役割を分担しているのに対し、段階３ではそのような役割分担は解除されて、有情名詞･非情名詞のいずれも活動動詞･到達動詞のどちらとも結びつく。

これらは､｢一般化｣が段階ごとに進んでいることの現れであろう。

３．２．３.「居る」からテイルへの生成過程

---

31 「庭に花が揺れている」と言うこともあるが、これは文学的な表現である。詳しくは、吉田（1996）を参照のこと。

32 「花が揺れている」「花が萎れている」に場所名詞を加えるとしたら、「庭の花が揺れている」｢花瓶の花が萎れている｣と､属格のノを用いるべきであろう。

テアル構文と正反対に有情物の存在を表す「居る」は、テイル構文になると非情物主語を持つことが可能になる。なぜこのような現象が起こるのであろうか。

まず、有情物主語の場合、

(8)　彼が電話をかけている。

という文の生成過程は、次のようである。

(9)　彼が電話をかける。

↓　［彼が［電話を　kake］る］

(8)　彼が電話をかけている。　［Ag、Th］

［[彼が[電話を　kake］て］いる]

元の文は、次の構造を持つ。

(10)　［[彼が］いる]　［Ag、Lo］

「居る」は内項を持たない非能格動詞であるから、「彼が」は外項になり、「彼が」が「いる」を修飾することになる。一方、(10)の構造も「いる」が最も外側に位置し、「彼が電話をかけて」が「いる」を修飾するという枠組みになり、「電話をかけ」が「彼が…て」に埋め込まれるという内部構造を持つ。つまり、(8)は大枠において、(10)と構造を同じくする現存文ということになる。

非情物の対象がテイル文に現れる場合、注意すべきことが一つある。それは、非情物は自らの力で動きを起こすことができない故、必ず動きの原因となるものが存在するということである。例えば、「花が揺れている」ことの原因は、「風」などが考えられる故、非情物の状態描述文には原因項が隠されている、ということである。

(11)　花が揺れている。

という文の生成過程は、次のようである。

(12)　風が花を揺らす。　［Ag[33]、Th］

↓　［風が［花を　yuras］u］

[33] 雨、風などの自然物は自然力を持つため、擬似動作主と考えられる。

(13)　風で花が揺れる。　［Th、Ca[34]］

↓　［t_1［風で］［花が］［［t_2 yur t_3］e］る］

(14)　風で花が揺れている。

［［t_1［風で］［花が］［［t_2 yur t_3］e］て］いる］

(11)　花が揺れている。　［Th］

［［t_1~~［風で］~~［花が］［［t_2 yurt_3］e］て］いる］

(12)から(13)に移行するに当たり、主格名詞「風が」が原因項に降格し、対象名詞「花を」が主格「花が」に昇格する。さらに主格名詞が交替したため、「花を」の痕跡 t_2 を伴った動詞「yuras」の as の部分が痕跡 t_3 となって語幹「yur」だけを残し、その外側に自動詞のマーカーである e が発生し、さらに「揺れる」が母音動詞であるために終止形は「る」になる。(14)では、「て」が発生し、降格した「風が」の痕跡 t_1 と「て」が同格になる。(11)ではさらに言語化の必要のない「風で」が省略される。

これも、「花が」「揺れて」が「いる」を修飾する形となっており、「花が［揺れている形で］存在する］という、正真正銘の現存文である。同様に、痕跡表現の「あっ、また犬がベッドで寝てる！」、および歴史的現在の「この犬は、前に一回人を噛んでいる」「この花は、去年の品評会で賞を取っている」はそれぞれ、「［犬がベッドで寝たという］事実が存在する」「［この犬が前に一度人を噛んだという］事実が存在する」「［この花が去年の品評会で賞を取ったという］事実が存在する」と言い換えられよう。これは、「道が曲がっている」「あごがしゃくれている」など形容詞に順ずるテイルが痕跡表現を表すことを考えれば、より明らかである。これらのことは、やはり「重層化」「維持」の原理に一致するものだと言えるであろう。そして、これも「Vして、その後もその状態がそのまま続く」という点で、やはり V-Te そのものに完了アスペクトがあると想定される。

[34] Ca：Cause：原因

３．３．テアルとテイルの文法化の程度

以上、テアルとテイルの文法化の過程と、その制約を見てきた。吉田（2007b）では、テアル構文がテイル構文を兼用する場合と、テイル構文がテアル構文を兼用する場合を考察した。

テアル構文がテイル構文を兼ねる場合は、①無対他動詞が前接する現存文、②脱使役化類の有対自動詞が前接する現存文、の２つである。テイル構文がテアル構文を兼用する場合は、①資料を見ながら事態を確認する現存文、②いわゆる「経験」「経歴」「記録」「歴史的現在」などと呼ばれる用法の現存文、③行為の痕跡を目の前にして述べる現存文、④着点項を持たない他動詞が前接する現存文、⑤非意図的な動詞が前接する現存文、⑥着点が話者と決まっている「境遇性のある動詞」が前接する現存文、の６つである。これを見るに、テイル構文がテアル構文を兼用する場合の方が、テアル構文がテイル構文を兼用する場合より遥かに多い。

また、３．１．１で見たように、他動詞の受身形にラサレテアルが後接するという「型破り構文」も存在する。

さらに、テアル構文は、「対象がＶという形で有る」という元の「有る」の意味を保っているが、テイル構文が元の「居る」の意味を保っているのは、主語が有情物の時だけである。テイル構文は有情物主語も非情物主語も取れるので、よりさまざまな文脈で使える。

以上のことから、「文法化が進むにつれて意味の分布が広がり、意味の分布が広がるにつれて語の選択制限が失われて、より広い文脈で使われるようになる」という「一般化」の原理に照らせば、テアル構文よりテイル構文の方が、より文法化が進んでいると言えよう。

４．テクル・テイクの文法化

４．１．テクルとテイクの非対称性

移動動詞「来る」「行く」は、通常は反対の移動方向を持つペアの移動動詞として認識されているが、実は移動方向は反対ではない。つまり、移動方向において、「来る」と「行く」は対称的ではない。

(15)　きのう、太郎が来た。

と言えば、着点は話者のいる場所、起点は対象（「太郎」）のもともといた場所と決まっているが、「行く」は着点が決まっていない故、

(16)　きのう、太郎が行った。

という文を、完全な文にするためにはニ格着点項を補わなければならない。また、この文からは、起点は太郎がもともといた場所であることがわかるだけで、話者のいる場所が起点とは限らない。それは、「来る」は「話者の方向に向って対象が移動すること」であるが、「行く」は対象が話者から離れていくことではなく、「ある地点から別の地点へ移動すること」だからである。つまり、「来る」の着点と「行く」の起点は異なるのである。

三上(1972）は、話者によって指示対象が変わる語（人称名詞、コソア指示詞、授受動詞、など）を「境遇性をもつ語彙」と呼んでおり（ｐ.36)、「行く」を「話し手以外の方向への物の移動」として、「来る」とともに「行く」も境遇性を持つ語として挙げている[35]。しかし、「明日来てください」と言った場合は、目的地は話者のいる所以外に選択肢はないが、「明日行ってください」と言った場合は、話者のいる所以外のすべての場所が目的地になる可能性があるわけだから、選択肢はほとんど無数である。「行く」に境遇性があるとしても、それは「目的地は話者のところではない」という消去的な境遇性であり、少なくとも「来る」との対称性は認められない。この非対称性は、補助動詞テクル、テイクの用法の非対称性をも形作る。

４．２．テクル・テイクの空間的移動を表す用法

[35] 金田一（1988)、森田（2000）も同様の立場を取っている。

今仁（1990）は、Ｖテクルと Ｖテイクは「移動を表す用法」と「アスペクトを表す用法」に大別される、と言う（p.54）。

まず、空間的移動を表す場合である。

① 移動の手段を表す動詞「歩く」「自転車に乗る」などの意志性の動詞はテクルにもテイクにも平等に後接し、「Ｖするという手段で移動する」という意味になる。

(17)　きょうは、バスに乗らないで、会社まで歩いて来た。

(18)　早く自転車に乗って行け。

これは、中止形の V-Te が少しだけ文法化した用法である。その証拠に、V-Te とクル／イクの間に副詞句を挟んでも非文にならない。

(17)’　きょうは、バスに乗らないで、歩いて会社まで来た。

(18)’　自転車に乗って早く行け。

② 活動動詞・達成動詞はテクルにもテイクにも平等に後接し、「Ｖしてからクル／イク」という意味になる。

(19)　ちょっと食事をしてきます。

この用法は、現在話者がいる場所から他の場所へ移動し、そこである動作（「食事をする」）を行なった後で、またもとの場所に戻る[36]ことを表す。しかし、

(20)　食事は外で済ませてきたから、用意しなくていいよ。

となると、着点は発話時に話者のいる場所であるが、最初の起点は不明である。要するに、この用法のテクルは、「着点が発話時に話者のいる場所である」ことを表すにすぎない。

(21)　帰りに得意先に寄っていくから、今日は会社に戻らない。

この用法は、目的地に到達する以前にＶをして、それから目的地に行くことを表す。この用法では、着点も起点も不明である。

③ 空間的移動を表す動詞には、テクルもテイクも後接する。

(22)　終戦を迎えて、戦士たちが次々に引き上げてきた。

[36] 広島の方言では外出の挨拶「行ってきます」を「行って帰ります」と言う。

(23)　終戦を迎えて、戦士たちが次々に引き上げていった。

なお、空間的移動の用法に限り、非対格動詞も使える。

(24)　洪水で、水が二階まで上がってきた。

(25)　足元の石が山の斜面を転がって、谷底へと落ちていった。

④ 動作の相手ニ格を持つ意志性の動詞に後接する場合は、テクルとテイクで全く意味が違ってくる。

(26)　母が私に小包を送ってきた。

(27)　私は母に小包を［*送っていった／送った］。

今仁（1990）は、送る、攻撃する、言う、などの動詞はテクルを後接すると動作の方向を示すことができるが、テイクをつけても動作の方向を示すことができず、「次々にVする」という意味にしかならない、と言う。筆者はこの種の動詞を、「動作の相手を持つ動詞」と規定したい。つまり、動作の相手を持つ動詞にテクルをつけると空間的方向を表すが、テイクにつくとアスペクト形式を表すことになってしまうのである。これはひとえに「行く」が語彙内部に起点も着点も含まないことに起因するのであり、前節で述べた「来る」と「行く」の非対称性ゆえに他ならないのである。

なお、今仁（1990）はこれらの動詞に加えて、

(28)　雨が降ってきた。

の「降る」も同様の統語的特徴を持つとしている。このテキタを吉川（1993）等は「開始」のアスペクトと捉えているが、筆者はこれも「空間的移動を表すテクル」と捉えたい。「降る」という動詞は確かに相手項を持たないものの、もともとの意味は天から地に向って対象が移動する、という方向性を持つ動詞である。そして、人間は通常は地上に棲息するものであるから、降雨という自然現象の受け手になる。その証拠に、雨以外の自然現象では、

(29)　風が［?吹いてきた／出てきた］。

(30)　あっ、また［?揺れてきた／揺れ始めた］（地震の余震）

と、テクルを使うのが不自然になるのである[37]。

４．３．テクル・テイクのアスペクトを表す用法

４．３．１．変化動詞に後接する場合

時間的移動は、空間的移動のメタファリックな抽象化である。この用法は基本的に、テクルはある事柄や動作が話者の発話時点に向って続行または反復すること、テイクはある事柄や動作がある時点から、それ以後の別の時点に向って、続行または反復することである。しかし、動詞の種類やテクル自体のアスペクト（テクル、テキタなど）によって未来や超時を表すこともあり、またテクルとテイクのいずれかしか使えない場合も出てくるのである。

① テクル類

教科書にある代表的なテクルの例、

(31)　先週からだんだん寒くなってきました。

を見てわかるように、前接動詞は変化を表す動詞である。しかし、

(32)　*だんだん日本に着いてきました。

と言えないことから、同じ変化でも瞬間的変化ではなく、時間幅を有する変化、つまり、変化の開始時と変化の完了時を持ち、過程を含む動詞である。このような動詞には、「寒くなる」「きれいになる」などナルを伴った動詞、「乾く」「腐る」「さびる」「晴れる」などモノや天候の属性の変化を表す動詞、「わかる」「おなかがすく」「頭痛がする」などの心理・生理状態を表す動詞など、人の制御不可能な変化を表す動詞がある。変化動詞とは一般に対象の変化を表わす、非意志性の動詞である。なぜ変化を表す動詞がテクルに後接するのか。「来る」はもともと、「話者の存在する地点に動作主または対象が近づく」という原義を持っているのであった。

(33)　日本がだんだん近づいてきました。

[37] (29)は、「話者の方向に向って風が吹く」という読みならば自然であろう。

は、対象（日本）の話者への空間的接近であるが、

(34)　夏休みが近づいてきました。

は、対象（夏休み）の話者への時間的な接近である。ここから、「空間的接近→時間的接近」の意味拡張（乃至メタファー）が見られる。

さらに、「わかる」「腹が立つ」「おなかがすく」など、心理や生理を表す動詞にテクルがつく場合がある。

(35)　だんだん真相がわかってきた。

(36)　何だか、おなかがすいてきた。

これらは、頭痛や理解の程度が増してきたということで、時間的接近から心理的・感覚的接近へのメタファーであろう。「だんだん寒くなってきました」は、「寒さ」が肌に感じる程度のものから本格的な寒さへと変化する感覚増幅の過程である。

最後に、例外的な例として、

(37)　現存文と意図達成文では、テイルの使い方が違ってくる。

など、「違う」「異なる」にテクルがつくことがある。もともと形容詞的な性質を持つこれらの動詞には、過程などあるはずがない。これは真性の事態変化過程でなく、２つの事柄の違いに気づく「認知の変化過程」の表現であると考えられる。事実は最初から決まっているにもかかわらず、人間が自分の認知の間違いを知り、正しい認知に近づくには時間がかかる。これは真実が現実のものとして話者に迫ってくる、という様相を表したもので、一種の心理的変化を表す動詞と考えられる。しかし、これらの動詞にはテクル・テキタは後接するが、テイク・テイッタを後接することができないのである。

以上、テクルの用法には「空間的接近→時間的接近→心理的接近」の意味拡張が見られることを確認した。

次に、テクル自身のアスペクト、ル形とタ形である。

変化の過程にある段階では「寒くなってきた」、または「寒くなってきている」、変化の完了時には「寒くなった」と言う。そして、変

化完了後に事態が持続している場合は、テイルを用いることになる。

［図１］

テキタ・テクル　　タ　　テイル

変化の開始 ⟶ 変化の過程 ⟶ 変化の完了 ⟶ 変化結果の持続

この際、変化の過程では「だんだん」「徐々に」「めきめき」など変化の進行を表す副詞を挿入することが可能であるが、変化の比較的初期の段階、あるいは変化に気づいたばかりの段階ではこれらの副詞は使えない。また、変化完了時には「すっかり」「めっきり」「ついに」など変化の完成を表す副詞を挿入することが可能である。この場合、完了のタ形を用いるのが普通であるが、まれにル形もある。

(38)　ああ～、だんだん寒くなってくるゥ～。

このテクルの用法は、相撲などの実況放送でよく聞かれるように、

(39)　朝青龍、押します。琴欧州、ふんばります。

など、情況の真っ只中にいる即自的視点でのル形の用法である。この場合は、(31)のように「先週から」などの変化の起点を示す語を挿入することはできない。起点を示すと「真っ只中性」が失われてしまうからであろう。

テキテイルは、同じ真っ只中でも未来のことが視野に入っている。

(40)　だんだん寒くなってきている。来週あたりには雪が降るかもしれない。

また、ル形の常として、未来や超時的な事実を表わす場合もある。

(41)　もうしばらくすると、ぐっと寒くなってきますよ。（未来）

(42)　太郎と話していると、頭が痛くなってくる。（超時）

② テイク類

これに対し、テイクが変化を表す動詞に後接すると、指定時点からの対象の「遠ざかり」を表す。

(43)　故郷がだんだん遠くなっていく。

は空間的な遠ざかりだが、

(44)　物価高で、マイホームがだんだん遠くなっていく。

は、時間的な遠ざかりと言えよう。

また、視覚的・感覚的な遠ざかりもある。

(45)　虹がだんだん消えていく。

(46)　記憶がだんだん薄れていく。

しかし、心理動詞・生理動詞にはテイクは使いにくいようである。

(47)　太郎と話していると、頭が痛く［なってくる／*なっていく］。

(48)　昔のことを思い出すと、切なく［なってくる／*なっていく］。

これは話者の内面を表現したものであるから、話者から遠ざかっていくテイク表現とは不協和音をなすのだと考えられる。

以上、テイクの用法には「空間的遠ざかり→時間的遠ざかり→感覚的遠ざかり」の意味拡張が見られることを確認した。

次に、テイク自身のアスペクト、テイク、テイッタである[38]。

指定時点が発話時および発話時以降の場合は、指定時点以後の変化を予測し、それがしばらく続行することを表す[39]。

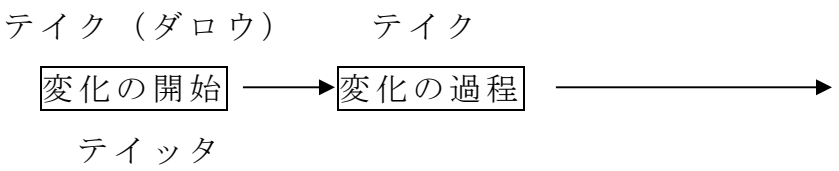
(49)　これからだんだん寒くなっていくだろう。

(50)　見ていてごらん、来年からどんどん物価が上がっていくよ。

指定時点が過去の場合は、テイクのタ形、テイッタを伴って過去の事態の回想になる。

(51)　彼らはそれから、どんどん金持ちになっていった。

［図２］



[38] テイッテイルはあまり用いられないようである。

[39] 発話時点以後の変化を表す場合は、テイクの後ろにダロウ、ト思ワレル、などの推量のモダリティを伴うこともある。

変化の開始 ⟶- - - - - - - - - - - - - - - 発話時

図２を見てわかるように、テクルと違うテイクの特徴は、変化の完了時が視点に入っていないことである。このことから、テクルは着点志向、テイクは起点志向であると言えよう。このことの傍証として、先の(47)(48)のような心理・生理動詞に関しては、テイクが使いにくいことが挙げられる。しかし、これらもテイッタを用いて過去の回想とするなら可能になる。

(47)’　私はいつも、太郎と話していると、頭が痛くなっていった。

(48)’　私はいつも、昔のことを思い出すと、切なくなっていった。

テクルと同様、テイクもル形のままで「事態の真っ只中」を表す。

(52)　　ああ、体重がだんだん減っていく。どうしよう。

これはテクルと違い、発話後の変化をも視野に入れた発話である。ここでル形が使われるのは、未来の終わりのない変化を予測し、ある感慨を表す、一種のモダリティ的用法と言えよう。

むろん、テクルの場合と同様、ル形の常で超時を表す場合もある。

(53)　　女の子は恋をすると、だんだんきれいになっていく。

③ 変化の過程を持たない変化動詞に後接するテクル・テイク

例えば、「死ぬ」「着く」「発見される」など、通常は副詞「だんだん」と共起し得ない動詞がこれにあたる。

(54)　　毎日、飢えで大勢の人が死んでいく。(「情況真っ只中」)

(55)　　古代の遺跡がどんどん発見されてきた。(過去からの継続)

これらは単一のものの漸次的な進行ではなく、複数の対象の瞬時的変化が反復的に生起する、いわば「経験」の用法である。

むろん、テクル・テイクのアスペクトを変えて、

(54)’　毎日、飢えで大勢の人が死んでいった。(回想)

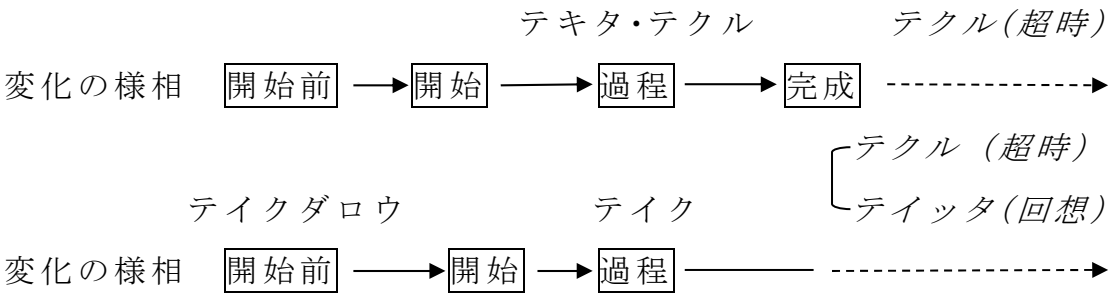
(55)’　古代の遺跡がどんどん発見されてくる／発見されていく。(情況真っ只中)

などとするのも可能である[40、41]。

④ テクル・テキタ・テイク・テイッタのまとめ

以上のことから、変化動詞に後接するテクル、テキタ、テイク、テイッタは図３のように示される。

［図３］



４．３．２．継続動詞に後接する場合

(56)　入社以来今まで 30 年間、会社にずっと尽してきた。

(57)　日本人はずっと米を食べてきたから長寿なのだ。

(56)の「尽す」のような精神的･抽象的行為は継続性があるゆえ、テキタに後接すると行為の持続を表わすが、(57)の「食べる」のような断続的な行為はテキタに後接すると、前節の「死ぬ」「着く」などと同じように、反復事象を表わすことになる。そして、「入社以来」などの起点副詞、「今まで」などの着点副詞、「30 年間」などの期間副詞、「ずっと」などの継続を示す副詞、「日本人は」などの総称名詞がないと、動作の持続性・反復性は保証されず、「Ｖしてからここに来た」という、空間的移動を表す意味になってしまう。

---

[40] 本節冒頭で、「*だんだん日本に着いてきました。」を非文としたが、「着く」という動詞も「うちの会社の飛行機は、今までずっと定時に着いてきたのに、今になって遅れるなんて…」などと事象反復の文脈にすれば何とか自然になる。

[41] なお、この反復の用法には「たくさんの人が死んできた」という例は見当たらないが、これは「死ぬ」という語彙の性質によるものではないかと思われる。なぜなら、「たくさんの人の命が失われてきた」とすれば不謹慎さが払拭され、耳に逆らわないからである。

さらに、意志的動詞の場合、変化動詞の場合のように「だんだん」など変化の進行を表す副詞を挿入することはできない。

(56)’　*入社以来今まで 30 年間、だんだん会社に尽してきた。

(57)’　*日本人はだんだん米を食べてきたから長寿なのだ。

また、継続動詞に後接する場合、テクルは使えない。

(56)”　*優秀な社員は、会社にずっと尽してくる。(超時)

(57)”　*日本人はずっと米を食べてくるから長寿なのだ。

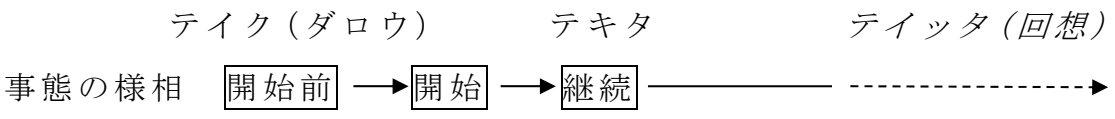
起点志向のテイクの場合は過去のことも未来のことも表すことができ、ル形もタ形も使える。

(56)”’　彼はそれから 30 年間、ずっと会社に尽くしていった。

(57)”’　日本人はこれからもずっと米を食べていくだろう。

以上のことから、継続動詞に後接するテクル、テキタ、テイク、テイッタは次のように図示される[42]。

［図４］



４．２．テクルの文法化と生成過程

テクルの文法化は、次のようである。

元の動詞：ヒト名詞・モノ名詞・コト名詞 ガ　来る

例「太郎が来る。」「台風が来る。」「夏休みが来た。」

段階１－１：動作主：有情名詞ガ　移動手段を表す動詞テクル

例「太郎が歩いてくる。」

段階１－２：動作主：有情名詞ガ　活動動詞・達成動詞テクル

例「太郎が散歩をしてきた。」「太郎が電気を消してきた。」

[42] なお、「みんな、大会まで頑張っていこうぜ。」のようなテイクは、アスペクトを表すものではない。この文の「いく」は、スポーツ観戦の時などの応援の掛け声、「いいぞ、朝青龍、そこだ、よし、行けっ！」などの攻撃体勢を表す「行く」であり、実質上「する」と同義のものなのである。

段階１－３：ヒト名詞・モノ名詞ガ　移動動詞テクル

例「太郎が帰ってくる。」「台風が襲ってくる。」

段階１－４：動作主：有情名詞ガ　対象ヲ　移動動詞テクル

例「太郎が手紙を送ってきた。」

段階２－１：対象：モノ名詞・コト名詞ガ　変化動詞テクル

例「野菜が腐ってきた。」「だんだん寒くなってくる。」

段階２－２：ヒト名詞・コト名詞ガ　継続動詞テクル

例「太郎がずっと勉強してきた。」「会議がずっと続いてきた。」

このうち、段階１は、主語名詞が話者の方に物理的接近をするという用法で、「主語名詞が来る」ことを表す。段階１－４では、対象「手紙」が話者のもとに来ることになる。段階２はより抽象化されたアスペクト的用法で、主語名詞の物理的移動があるわけではない。テクルの意味の分布は、かなり広範にわたっていることがわかる。

テクルの生成過程は次のようである。例として、１－４の「太郎が手紙を送ってきた」と、２－１の「野菜が腐ってきた」を挙げる。

(58)　手紙が来た。　［Th］

↓　［手紙が［k]i た］

(59)　太郎が手紙を送った。

↓　［*t*［太郎が［手紙を oku(r)］t た]]

(60)　太郎が手紙を送ってきた。

［[*t*［太郎が[手紙を oku(r)]t て］k］i た］　［Ag、Th］

元々は(59)「手紙が来た」から始まり、(60)で主語の「手紙が」は「送る」の内項に移動するとともに、新しい主語「太郎が」が加わったために痕跡 *t* として最も左端に位置するようになる。(60)でテキタが加わると、「太郎が」と「て」が同格となり、「手紙を」の痕跡 *t* と「きた」の語幹「k」が同格になり、完了のマーカーの「た」は右端に孤立する。全体に、「[手紙(痕跡 *t*) が来る］という事実が発生した」という構造が見て取れ、「手紙が来る」というもとの構文

が保持されている。これは、「重層化」「持続」の原理と一致する。

(61)　野菜が腐った。　［Th］

↓　［［野菜が　kusa(r)］ｔた］

(62)　野菜が腐ってきた。

［［［［野菜が　kusa(r)］ｔて］ｋ］ｉた］　［Th］

「腐る」は非対格動詞で内項を主語とするから、完了のマーカー「た」が外側に位置する。(62)で加わったテ・キ・タも順次外側に位置する。全体に「［野菜が腐る］という事態が目の前に迫りつつある」という構造になる。

ここから、テクル構文の「Ｖしてから、来る」という構造が「より広い文脈で使われるようになる」という「一般化」が見て取れる。

４．３．テイクの文法化と生成過程

テイクの文法化は、次のようである。

元の動詞：ヒト名詞・モノ名詞 ガ　場所名詞ニ　行く

例「太郎が学校に行く。」

「私の本が太郎のところに行っている。」

段階１－１：動作主ガ　場所名詞ニ　移動手段を表す動詞テイク

例「太郎が学校に歩いていく。」

段階１－２：動作主：有情名詞ガ　活動動詞・達成動詞テイク

例「太郎が食事をしていく。」「太郎が電気を消していった。」

段階１－３：ヒト名詞・モノ名詞ガ　移動動詞テイク

例「太郎が帰っていく。」「雲が去っていった。」

段階２－１：対象：モノ名詞・コト名詞ガ　変化動詞テイク

例「野菜が腐っていく。」「だんだん寒くなっていった。」

段階２－２：ヒト名詞・コト名詞ガ　継続動詞テイク

動作主：有情名詞ガ　対象ヲ　移動動詞テイク

例「太郎がずっと勉強していく。」

「会議がずっと続いていく。」

テクルと同様、段階１は、主語名詞がある場所から別の場所に物理的移動をするという用法で、「主語名詞が行く」ことを表す。段階２はより抽象化されたアスペクト的用法で、主語名詞の物理的な移動があるわけではない。

テイクの生成過程を、段階１－２「太郎が食事をしていった」を例にとって示す。

(63)　太郎が行った。　［Ag］

↓　［太郎が［i(k)］ｔた］

(64)　太郎が食事をした。　［Ag、Th］

↓　［太郎が［食事を sh］ｉた］

(65)　太郎が食事をしていった。　［Ag、Th］

［［太郎が［*t*［食事を sh］ｉて］i(k)］ｔた］

(63)の文の中に(64)が埋め込まれた形が(65)であるが、(65)では「食事をした」の主語の「太郎が」が「行った」の主語の「太郎が」に追い出された形になって、痕跡 *t* になる。最終的には「太郎が」と「行く」の語幹が同位になる。

段階１はこのように、みな「主語名詞が行く」の中に「主語名詞がＶする」が埋め込まれた構造になっているのである。段階２は、前節「野菜が腐ってきた」と同様の構造になる。

ここから、「Ｖしてから、行く」という構造が見て取れる。

４．４．テクルとテイクの文法化の程度

テクルとテイクの文法化の過程と、その制約を見てきた。両者の用法を、表２にまとめる。

［表２］

	空間的移動を表す用法	アスペクトを表す用法

動詞種類	移動手段を表す動詞		Vシテカラ～の意味		空間移動を表す動詞		相手ニ格を持つ動詞		変化動詞・過程有り		変化動詞・過程無し		継続動詞		心理動詞・生理動詞		相手ニ格を持つ動詞		動詞違う/異なる	
	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ	ル	タ
テクル	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
テイク	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×

表２から、テイクの方がテクルよりも制約が多いことは、一目瞭然であろう。よって、「文法化が進むにつれて意味の分布が広がり、意味の分布が広がるにつれて語の選択制限が失われて、より広い文脈で使われるようになる」という「一般化」の原理に照らし、テクルの方がテイクより文法化が進んでいることがわかるのである。

５．終わりに―補助動詞と V-Te のアスペクト性

本稿の冒頭に、次の２つの問題を提起した。

① なぜ V-Te には 10 種に代表される動詞しか後接しないのか。

② なぜこれら 10 種の動詞は、V-Te に後続するとアスペクト性を帯びるようになるのか。

２．３．で示した補助動詞の左右行列でアスペクト性が高いのは、テイル、テアル、テイク、テクル、テオク、テミルであった。「居る」「有る」は最も基本的な存在動詞である。「行く」「来る」も基本的な移動動詞であるが、意志性の動詞であるにもかかわらず、「台風が来た」「チーズはどこへ行った？」など、非情物主語を取ることもあり、比喩表現が可能な動詞である。「置く」も「それはさておき」など、対象がモノ名詞だけでなく、コト名詞が用いられることもある。「見る」も「今度の選挙は与党が負けると見た」など、単に視覚表現だけにとどまらない。つまり、いずれも基本語彙であり、用法が一つの語彙的意味に限定されることなく、さまざまな比喩表現を可

能にする汎用性を持っている。つまり、文法化がされやすい動詞と言える。これらの動詞が V-Te に後接すると、「V-Te+補助動詞」は一様に「Ｖしてから～する」という構造を持つようになり、アスペクト化する。補助動詞の文法化とは、アスペクト化である。

これは、ひとえに V-Te が完了のアスペクトを持つことから起こる現象ではないだろうか。本稿で扱わなかった補助動詞、テオク、テミル、テシマウ、テヤル、テクレル、テモラウ、また本稿で取り上げなかった 10 種以外の補助動詞、テミセル、テスム、テスマス、テヨコス、テマワル、テノケル等の他の補助動詞も、同様の構造を持っているかと思われるが、それはまた別稿で論じたい。

最後に、拙稿の細かい問題点をご指摘くださった審査の先生に感謝の意を表させていただきたい。

［参考文献］

井上和子『日本文法小事典』東京、大修館書店、1996

今仁生美「Ｖテクルと Ｖテイクについて」『日本語学 Vol.９　５月号』東京、明治書院、1990、p.54－66

金田一春彦『日本語（下)』東京、岩波新書、1988

杉村泰「形式と意味の研究－テアル構文の２類型－」『日本語教育 91 号』東京、日本語教育学会、1996、p.61－72

鈴木重幸『日本文法・形態論』東京、むぎ書房、1972

テニハ秘伝研究会編『テニハ秘伝の研究』東京、勉誠社、2003

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』東京、くろしお出版、1986

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京、くろしお出版、1987

寺村秀夫「テンス・アスペクトのコト的側面とムード的側面」『寺村秀夫論文集Ⅰ』所収、東京、くろしお出版、1995、p.21－41

湯廷池「『読んで』『読みつつ』『読みながら』―動詞の活用語形とその意味機能」未発表、2007、東呉大学 2006 年度博士課程講義録
時枝誠記『日本文法文語編』(2005 年復刻版) 東京、岩波全書、1954
長野ゆり「仮定を表す『～てみろ』の用法について」『日本語教育 96 号』東京、日本語教育学会、1998、p.143－153
根来司『てにをは研究史』東京、明治書院、1980
原沢伊都夫「テアルの意味―テイル形との関係において―」『日本語教育 98 号』東京、日本語教育学会、1998、p.13－24
原沢伊都夫「テアルの意味分析－意図性の観点から－」『日本語文法 5 巻 1 号』東京、くろしお出版、2005、p.20－38
日野資成『形式語の研究』福岡、九州大学出版会、2001
益岡隆志『命題の文法』東京、くろしお出版、1987
益岡隆志『日本語文法の意味と諸相』東京、くろしお出版、2000
松下大三郎『増補校訂　標準日本口語法』東京、勉誠社、1989
三上章『現代語法序説』(2003 年復刻版) 東京、くろしお出版、1972
森田良行『動詞の意味論的文法研究』東京、明治書院、1994
森田良行『日本人の発想、日本語の表現』東京、中公新書、2000
森山卓郎『日本語動詞述語文の研究』東京、明治書院、1988
山崎恵「『－ておく』と『－てある』の関連性について」『日本語教育 88 号』東京、日本語教育学会、1996、p.13－24
山本裕子「『くる』の多義構造－『くる』と『てくる』の意味のつながり－」『日本語教育 105 号』東京、日本語教育学会、2000、p.11－20
吉川武時「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』東京、むぎ書房、1993、p.155－327
吉田妙子「場所を示す『に』と『で』―『海辺に遊ぶ』という表現はいかにして可能になるか―」『第二屆第四次論文発表会論文集』台北、中華民国日本語教育学会、1996、ｐ.26－39

吉田妙子「日本語の中止形『V-Te』と『V(i)』の相違―形態論・統語論・語用論からの比較―」『台湾日本語教育論文集第十号』台北、台湾日本語教育学会、2006、p.1－30

吉田妙子「テ形再考―生成文法の観点によるテ形の用法分類―」『政大日本研究第四號』台北、政治大学日本語文学系、2007a、p.109－138

吉田妙子「テアルとテイルの相互交渉と『受身形＋テアル』構文の出現条件」『台湾日本語教育論文集第十一号』台北、台湾日本語教育学会、2007b、12月発行予定

P.J.Hopper and E.C.Traugott、日野資成訳『文法化』福岡、九州大学出版会、2003